PROJECT

医療者との協働による医療人類学教育の検討

文
飯田淳子

共同研究 ● 医療者向け医療人類学教育の検討：保健医療福祉専門職との協働（2015-2018 年度）

近年、開発協力や災害復興、地域振興など、さまざまな局面で人類学者と社会との協働が行われ、そのなかで人類学の役割についての検討が要請されている。本共同研究はそうした動きに連なり、保健医療福祉専門職（以下、「医療者」）との協働を通じ、医療者向け医療人類学教育について検討する。

変化する医療福祉現場と医療人類学教育

少子高齢化、疾病構造の慢性疾患への変化などに伴い、日本の保健医療福祉の現場では「暮らしの現場のケア」の領域が拡大しつつある（星野 2015）。そのなかで医療者は、もはや治療だけでなく、「QOL の向上」「リスク管理」「判断支援」「家族の満足」など、従来の「医療」の範疇を越える複雑で多様な課題に日々直面している（樫田 2015）。そうした医療者にとって、事象をその社会的文化的文脈のなかで理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後 5 年程度の間に全国の医学部が受けることになっている認証評価の基準のなかで、医療人類学が言及されている。こうしたなか、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題である。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働によりこの課題にとり組み、医療者向け医療人類学教育の教材を開発することを目的としている。

医療者との協働による教育・実践現場の接続

本共同研究は、2014 年度に始まった文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」（代表：浜田明範）のなかの「医療者向け医療人類学教育」ワーキンググループ（代表：飯田淳子、以下 WG）を基盤としている。この WG には医師や看護師（人類学に／から転向した者、人類学と臨床の双方に従事している者を含む）、医学教育や作業療法の専門家らが含まれている。この活動の延長線上に本共同研究は位置づけられる。

臨床に出た医師は、それまで医学部で学んできた医学では解決できない多くの課題に直面する（2001 年、京都府舞鶴市、錦織宏提供）。

研究会の構成

氏名	所属	役割分担
飯田淳子	川崎医療福祉大学	統括、医学・福祉教育
伊藤泰信	北陸先端科学技術大学院大学	看護教育
梅田夕奈	東京都立松沢病院	医学教育
大谷かがり	中部大学	看護教育
工藤由美	亀田医療大学	看護教育
鈴木七美	国立民族学博物館	高齢者福祉に関する教育
辻内琢也	早稲田大学	医学・薬学・社会福祉学教育
照山絢子	筑波大学	障害者福祉に関する教育
錦織　宏	京都大学	医学教育学
濱　雄亮	慶應義塾大学	医学教育
浜田明範	国立民族学博物館	国際保健に関する教育
星野　晋	山口大学	医学教育
堀口佐知子	テンプル大学日本校	精神保健・精神医療に関する教育
松尾瑞穂	国立民族学博物館	生殖医療に関する教育
吉田尚史	東京武蔵野病院	医学教育

医療者向け人類学教育のあり方は、これまで一部の医療人類学者によって何度か検討されてきたものの、医療者教育の現場において、その重要性の認識は限定的なものにとどまっている。また、従来日本語で出版されてきた医療人類学の教科書では、とりあげられている事例やトピックと現代日本の保健医療福祉現場との乖離が大きく、文化人類学専攻の学生以外を対象にそれを用いるには困難が伴う。さらに、保健医療福祉系学部では専門科目の過密化により、教養教育の比重が減少傾向にあり、従来の教養教育向けのものとは別の形のカリキュラムや教材を開発する必要がある。本共同研究では前述の WG に含まれる医療者、および本共同研究メンバーの研究協力者である医療者との協働により、現場の状況に即した医療者向け医療人類学のあり方を提示することを目指している。

医療現場の事例から出発する

以上のような目的意識のもと、第 1 回目の共同研究会が 2015 年 11 月 7 ～ 8 日に開催された。まず、星野晋が 18 年間に及ぶ医学部での教育や医学教育学会の準備教育・行動科学教育委員会での活動に基づき、この間の医療環境・医学教育の変化・動向と、社会科学教育のあり方の模索過程、そしてそこから見えてきたことを報告した。前例のない超高齢社会に突入した日本社会では、育成すべき医師像が変化し、医学教育は変容を余儀なくされる。星野によれば、今後もっとも多く必要とされる医療専門職は、急性期医療と在宅ケアを

橋渡しする人材である。そうしたなか、社会的文脈において医療を理解する視点と方法を提供する社会科学的アプローチはますます重要性を増していく。それを習得するには、医学部の高学年次から卒業後に社会・文化的課題を含む事例やシナリオを用いた事例検討や PBL（問題解決型学習）を繰り返す必要があると星野は主張する。そしてそのような教育を可能にするためには、医療者と社会科学者が協働して教材や教育手法を開発していかなければならない。星野らが近年、医療者とともに行っている PBL 用シナリオ作成のワークショップはその一つの試みであり、本共同研究のメンバーもそれに参加している。

続いて濱雄亮は、医療人類学的知見を医療系学生の教育に生かす方法を、濱自身による授業実践を分析することで検討した結果を報告した。濱は授業で、1 型糖尿病当事者でもある自身の患者会での交流のあり方、血糖値をはじめとした数値と身体の意識のし方、内視鏡検査に伴う病いの経験を分析した自己エスノグラフィをトピックとし、「医療専門職の視点」と「患者の視点」の意識化と両立を図ったところ、その意図はおおむね達成できたという。それらの授業で提出されたレポートの記述からは、（1）具体例や実情に対する興味の旺盛さ、（2）医師や看護師への予期的社会化に基づくシミュレーションを行う姿勢、つまり将来の自らの役割に直結させて考える傾向の存在が明らかになったという（濱 2015）。

上記 2 人の発表に共通することは、人類学の概念からではなく、医療現場や患者の経験の事例から出発し、それらを人類学的視点や思考と接続させることの重要性である。同様のことは、家庭医の症例検討会に人類学者が参加するという試みについての飯田による報告でも強調された。家庭医は地域のかかりつけ医ともいえ、家庭医療は先の星野の言葉でいえば「暮らしの現場のケア」にもっとも関与する科である。人類学とひじょうに親和性があり、欧米の家庭医療学のテキストには人類学の知見が盛り込まれている。人類学の視点や考え方の有用性を家庭医に理解してもらうにはどうすれば良いかを、飯田と本共同研究メンバーで医学教育学の専門家である錦織宏が議論するなかで生まれたのが上記の企画である。

この症例検討会では、まず、家庭医が医学で対処できずに「モヤモヤした」事例を発表し、そこで出された問いについてグループディスカッションを行う。例えば、患者の言動をどう理解すれば良いかわからなかった事例や、自分のした対処が適切だったのか疑問の残った事例などである。各グループには人類学者も参加する。その後、人類学者が各事例について人類学的な観点からコメントし、さらに質疑応答を行う。これまでのところ、プライマリ・ケア連合学会でのワークショップという形でこうした症例検討会を 2 回行い、本共同研究のメンバーのうち 9 人が参加しており、今後も継続して行う予定である。2 回ともひじょうに活発な議論が行われた。参加した医師達からは「普段漠然とやっている自分の習慣に言葉の枠がたくさん与えられた」「他の視点が得られた」「視野が広がった」、人類学者からも「（家庭医の人たちは）思いのほか、生活の文脈についての理解がある」「インスピレーションを受けることができた」などの感想が聞かれ、双方にとって学びあうものが多いことが明らかとなった。守秘義務などの課題もあるが、この企画でとりあげた事例を蓄積し、教材として書籍化することも検討している。本共同研究はこうした医療者との活動と研究会での議論とを有機的に結びつけていく。

今後に向けて

今後は、看護や福祉、国際保健などの領域での医療人類学教育の現状を検討した上で、医療者から医療人類学（者）への期待・要望を把握する。それらを念頭におき、医療者に提供する医療人類学の教育プログラムについての具体的な提言や教材の作成・検討作業を行っていく。

この過程において、本共同研究は人類学者にとって異文化といえる医療者との相互交流であることを強く自覚し、相手の立場を理解し、かつ人類学のエッセンスを削がずに協働を達成できるよう努める。これは当然容易なことではない。人類学者は医療者と医療現場という広大で奥深い世界についてもっと知る必要があるし、もっと相手に伝わる言葉で自らの営みや考え方について説明しなければならない。そのなかで、「人類学のエッセンス」とは何か、社会学や生命倫理学など隣接諸分野との差異は何かといったことを問い続けることになるだろう。しかしその作業は人類学を豊かにする（伊藤 2011）ことにつながるはずであり、本研究はそのための、刺激的で実りある対話の場にもなるものと予感している。

訪問診療は医師にとって患者の生活について学ぶ場でもある
（2001 年、京都府舞鶴市、錦織宏提供）。

【参考文献】

伊藤泰信　2011 「人類学を／で豊かにすること──他領域との関係から人類学の拡張可能性を考える」『九州人類学会報』38: 85-88。

樫田美雄　2015 「現代社会の特徴と医学教育改革の必要性──社会学の立場から」『医学教育』46（4）: 315-321。

濱雄亮　2015 「医療人類学教育の実践──その課題と授業研究の提示」鈴木正崇編『森羅万象のささやき──民俗宗教研究の諸相』pp. 869-889, 風響社。

星野晋　2015 「変容する日本の医療環境を生き抜くために──医学教育と社会科学の協働の可能性」『医学教育』46（4）: 308-314。

いいだ じゅんこ

川崎医療福祉大学医療福祉学部教授。専門は文化人類学、医療人類学。タイの民間医療・伝統医療や日本の緩和ケアなどの研究を行っている。著書に『タイ・マッサージの民族誌──「タイ式医療」生成過程における身体と実践』（明石書店 2006 年）、論文に「医療福祉系大学教育における文化人類学の役割」『医学教育』44（5）: 279-285（2013 年）など。